

SHOW HEY シネマルーム

★★★★★

激動の昭和史 沖縄決戦

配給/東宝

2003 (平成15) 年8月12日鑑賞

Data

監督: 岡本喜八

脚本: 新藤兼人

出演: 小林桂樹/丹波哲郎/仲代達
矢

👁️👁️ みどころ

敗戦直前の沖縄決戦。そこでは軍人10万人の他、県民の3分の1にあたる15万人が死亡した。岡本喜八監督が、その沖縄決戦を史実に基づき描いた1971年の東宝オールスターによる2時間29分の大作30年を経た今も若者に観せたい映画だ。私の8・15はいつも「あの戦争」を考えたい。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

<1971年製作の歴史大作>

地下鉄九条駅にあるミニシアター「シネ・ヌーヴォ」は、平成15年8月、沖縄特集を組んだ。そしてその中で『激動の昭和史 沖縄決戦』（71年）と『ひめゆりの塔』（53年）の2本を数回上映した。『激動の昭和史 沖縄決戦』は、戦後26年の1971年に岡本喜八監督がメガホンを取り、東宝のスターを総動員して沖縄の悲惨な戦いを再現したものの。冒頭、フィクションが含まれていると断われているものの、その多くは史実に即しているうえ、当時のニュースフィルムが多数使用されたり、特攻兵の手記が紹介されたりしているため、その現実性は抜群。ナレーションによる解説は少ししつこい感じがしないでもないが、これは今初めてこの映画を観る人のためには不可欠だろう。もっとも、言葉や解説がなくとも、戦争の、そして沖縄戦の悲しさは映像から繰り返し繰り返し伝わってくる。沖縄戦では軍人の死者10万人もさることながら、県民45万人のうち、3分の1にあたる15万人が死亡した。

<今思いおこす沖縄戦>

私は戦後の1949年生まれだから、戦争体験はない。沖縄戦が戦われたのは、終戦の日となった1945年8月15日と同じ年の4月1日から6月23日。日本は既に敗色濃

厚となっていた時期だ。陸軍だけはまだ「残存戦力」があり、「本土決戦」を叫んでいたものの、海軍（連合艦隊）は既に壊滅状態。戦艦大和を沖繩に派遣するにも、往復の燃料さえ無い状態だった。さらに陸・海軍の保有する飛行機は乏しいうえ、経験のある優秀なパイロットはほとんど戦死し、若者による特攻攻撃しか手段がないという惨憺たる状況となっていた。「特攻」戦術は海軍も同様で、爆弾を抱えたボートのようなもので、敵艦に肉薄して体当たりするしか対抗手段はないという有り様だった。

そんな中で、沖繩戦が戦われたが、これは「本土決戦」に向けて少しでも敵戦力に打撃を与えるとともに、本土防衛の準備のため、少しでも時間かせぎをするという意味しかないものだった。そのため、「戦争や戦闘は軍人がするもの」という常識は全く通用せず、沖繩県民45万人のすべてを巻き込み、全島が地獄の戦場と化する戦いが展開されたのだ。この悲惨な戦いを記す資料は今も数多く残っているが、大切なことはそれを語りついでいくことだ。1945年8月6日の広島への原爆投下、8月9日の長崎への原爆投下。この記憶を風化させてはならないのと同様、沖繩での2カ月余に及ぶ悲惨な激闘の体験も風化させてはならない。

＜お盆休みと終戦記念日ー「あの戦争」を考える契機＞

日本にはお盆休みがある。その過ごし方は、時代の流れ、経済的豊かさの程度、社会風習の変化等に対応して少しずつ変化している。「ふるさとに帰ってゆっくりとお墓参り」という「帰省ラッシュ」が1つの定番だが、最近はこちらも少し減っているらしい。また、バブルの時代には大挙して海外旅行に出かけていたが、経済不況と「SARS騒動」の今年にはメッキリと減り、「安・近・短」の旅行となっている。夏の高校野球人気は相変わらずだが、私は最近では少しご無沙汰気味。

そして毎年のように8・15の終戦記念日がやってくる。昨年と一昨年は小泉総理の靖国参拝問題のため8・15は大揺れだったが、今年は少し平穏だ。このお盆休みと終戦記念日、私はいつも何らかの形で「あの戦争」のことを考えている。なぜならば、それは日本人として今を生きていくうえで絶対必要な作業だと思うから。生まれた時代や生まれた地方によって「あの戦争」の体験や思いはさまざまだろう。例えば、両親から被爆体験を聞いた広島や長崎の人達は、その生々しさや恐怖心において他の地方の人とは当然違うだろう。また、両親から戦争体験や空襲を受けて逃げ回った体験を聞いたことのある人とそれのない人達との違いも当然あるだろう。しかしそういう違いを乗り越えて、日本人みんなが今の自分の生き方を見つめるために、「あの戦争」を考えることは不可欠だ。私はそんな思いで、毎年8・15を迎えたい。あの悲惨な沖繩戦を描いた2時間29分の大作『激動の昭和史 沖繩決戦』の鑑賞によって、今年はそんな気持ちを新たにすることができた。

2003（平成15）年8月13日記